【エッセイ】

アロヨふたたび

――言語時評・四――

工藤力男

五月十日朝八時半、ラジオ第一放送のニュースで、その日に行われるフィリピンの大統領選挙の投票について、輿論調査に基づく当選予想者に関する報道があった。そのなかで現役の大統領の名を四回いずれも単語として「アロヨ」と読んだ。ロが高いのである。一度だけ複合形の「アロヨ大統領」があった。同日、夜七時のテレビのニュースも、二回とも「アロヨ」であった。なお、この二つの報道は異なるアナウンサーが担当した。

この国の大統領選挙に対して、わたしが格別な関心を寄せているわけではないが、三年前に実施された、短期大学部から本学部国文学科への編入学試験に左掲の問題が出ている（片仮名の傍線は高い拍を示す）。

問　今年一月の政変でフィリピンの大統領に就任したアロヨ氏を、日本放送協会の報道では、「アロヨ」「アロヨ」「アロヨ」と、三様のアクセントで呼んだ（傍線は「高」の調素を意味する）。これについて論ぜよ。

これがあったので、わたしはこの人の名を、当協会のアナウンサーがどう読むか気にかけていたのである。すると、昨年十月十二日夜十時のテレビのニュースで、翌年大統領選挙が行われる旨について報道したときは「アロヨ」であった。そして今回の報道である。三年前には協会の中で揺

れていたアクセントが中高型（なかだかがた）に定着しかかっているように思われたが、このアクセントはわたしに強い違和感を与える。その原因を考えてみたい。

日本人にとって、ひとたび獲得したアクセントを修正することは極めて難しい。関東出身の俳優が関西人に扮した映画などは、どんなに努力しても嘘臭くて興ざめするという京都の友人がある。わたし自身、尊敬する監督の演出した、東北地方を舞台とする良心的な映画なのに、中途半端な東北弁のせいで、さっぱり心に響かなくて残念に思ったことがある。短い製作期間に、出演俳優がその地域語をアクセントも含んで習得するようにしむけることは、とても無理な話であろう。

異体系のアクセントを習得する困難さについて思い出す人がある。それは、フジテレビの人気アナウンサーだった故逸見政孝氏。その話し方に、出身地をうかがわせるものをわたしは感ずることがなかった。没後に放送された逸話によると、氏は京都の出身であった。京都の大学で英文学を学んだが、放送業界にはいりたくて、アクセント辞典を数冊消耗するほどの猛烈な訓練によって、自分の言葉から京都弁臭を消しさったのだという。

日本語教育にも少しばかり関わることのあったわたしは、アクセントについては殆ど無視に近い態度をとってきた。わたし自身は秋田市の方言で育ったので、おおむね東日本アクセントを身につけているはずだが、個々の語になるといかにも怪しい。例えば、空の「雲」と虫の「蜘蛛」は東京語では同一の頭高型（あたまだかがた）とされているが、自分では区別への志向がはたらいていつも揺れる。しかし、現実の生活でアクセントの違いが意思疏通の障碍になることは殆どない。関西の藝人が放送で活躍しているのは、日本じゅうの人がそれを受けいれているいい証拠であろう。

アクセントを無視しえない類いの語がある。固有名詞である。「アロヨ」が違和感をもってわたしの耳についたのもそれゆえである。近年のアクセント変化の概略については、工藤「『春よ来い』の言語学」（『成城教育』八十八号（1995））に書いたので、本稿に必要な限りで重複を覚悟して書くことにする。

秋永一枝編『明解日本語アクセント辞典』（三省堂（1981））は、大部の「東京アクセントの習得法則」を付載

する。その冒頭「名詞の一般について」から一部を抜きだして掲げる（横組みの原文を縦組みに変え、アクセント表示も本稿の方式による）。

二拍語　頭高語：漢語・外来語・日常用いられない語彙・新造語は、ほとんどこの型。

三拍語　頭高語：漢語・外来語は、平板型か、この型がほとんど。

また、「外来語の単純名詞」の項には左記のようにある。

二拍語―原則として頭高型。

ジャム　バタ　パイ　ジョー　ピン

三拍語―原則として頭高型。但し、引き音で終るものは、原語のアクセントを残す傾向がある。

グラス　ケーキ　ダンス　セット

クレー　タブー　フリー

四拍以上の語―原則として終りから三拍めまで高い。

レコード　クリーム　ナトリューム

この法則の妥当性を確認するには、世界地図を開いて、なじみの薄い地名を拾いあげてみるといい。二拍語、アチェ、ガザ、モロ、チリ、リマなど、すべて頭高型である。三拍語も、アクラ、ババマ、ケソン、リヤド、サヌア、チラナ、ルサカなど、すべて頭高型に発音されるだろう。これによって、わたしの違和感の由来が分かる。十数年前に報道を賑わしたサリン、オウム、サティアンなどは、多くの日本人にとって初めて接する語であったはずだが、これらも法則どおり頭高型に実現するのが普通であった。新造語もこれに準ずること、ベア（↑ベースアップ）、ぴあ（Pia）、アナ（ＡＮＡ）、ジャル（ＪＡＬ）、ドコモ（DoCoMo）、スイカ（Suica）、イオン、ジャスコなどに見るとおりである。

フイリピンの人名「アロヨ」は、日本人の用いない語ゆえ、新造語に近い、三拍の、外来語の、単純名詞である。しかも、これはアクセント法則に例外が生じるような特殊拍を含んでもいない。この類いの語が頭高型に発音されやすく、しかも短小な語ほど例外が少ないことは、わずかの拍で対象を誤りなく把握させる必要があるからである。右に見たアクセント法則は、言語としてじつに合理的かつ効率的なものだと言える。これだけ条件の揃った「アロヨ」なのに、アナウンサーの発音が揺れたのである。語形のよく似た植物名「アロエ」の東京語アクセントはアロエである。三年前の放送で、「アロヨ」のアクセントが三様に揺

れたのは、原語のアクセントの反映ではないことを語るだろう。

ついでに言う。『ＮＨＫウィークリーステラ』という情報誌がある。宣伝放送で聞くアクセントは「ステラ」、新造語にして中高型である。立ち読みして得た知識では、これは“Satellite”“TElevision”“RAdio”の頭文字による名で“STERA”なのだという。外来語めかして作りたかったのだろうが、どのみち日本人に通じないことには変わりがないのに、『SATERA』としなかった理由は不明である。ところで、これが頭高型で呼ばれないのには訳があったのだ。日本語の「ス」は、平唇（ひらくち）の狭母音をもつゆえに無声化しやすい拍である。しかも、「ＳＴＥＲＡ」と母音を添えないローマ字表記がなされている。第二拍の「テ」も無声の頭子音［t］をもつ。かくて「ス」が無声化する条件は揃っている。そして、東京語には「無声の拍はアクセント核にならない」という法則がある。すると、「ステラ」は、アロヨとは異なる契機による中高型だということになる。

この四半世紀における日本語のアクセント変化は、押しよせる平板化の怒濤に席巻された観がある。アナウンサーも訓練期間には東京語アクセントの習得に努め、アクセント変化の実態を学び、配属先にあっても日々注意を怠らないだろう。それでも意外なアクセントの出現するのが現実である。三年前の報道で三つの型の出現順位までは知らない。今回、「アロヨ」が頻出するのはなぜだろう。これは、規範的な発音が「アロヨ」であることを知識として持ちながら、近年勢力を広げた平板型になじみ、また引かれて「アロヨ」になろうとする発音を修正しようとした結果、その中間的な中高型になってしまった、言わば鵺のごときアクセントなのではなかろうか。そう考えると、同情すべき点もあるのだが、放送を専門とする職業人としては、やはり褒められたことではない。

固有名詞のアクセントは特に規則性が高いので、規則をはずれて発音されると、耳に障って記憶に残ることが多い。例えば、福島県はいわゆる一型（いっけい）アクセント地域で、アクセントの型の違いを有しない。わたしの大学院の授業に出ていた福島市出身の学生は、「古事記」を東京語の「乞食」のアクセント「コジキ」で読むので大いに閉口した。頼むからそれだけは直してくれと言うと、当座はどうにか修正

しえても、次の機会にはまた「乞食と萬葉集」とやらかしたものである。対象となる一語にとどまらぬ、体系としてのアクセントゆえ、なかなか修正が利かなかったのだ。きょうもあの調子で、同じ一型アクセント地域である水戸市の高校生たちと、「乞食や日本書紀」を勉強していることだろう。

四拍の固有名詞類についても、右記の法則などに照らしてみると、気付かれることが多い。ラジオの音楽番組でラヴェルの楽曲名が「ダフニスと黒江」になり、中国の経済解放区「深圳」が「新鮮」になる。そう言えば、昔、歌舞伎役者の八代目市川中車が「俺はチュウシャじゃあねえ」とおこったという話を読んだことがある。その文章の文字が「駐車」だったか「注射」だったかは、記憶が定かでない。テレビやラジオの報道で、シャンハイ、ナンキン、ホンコン、テヘランを耳にしてすでに久しい。昨年来「クウェート」も頻繁に聞いた。とどまることを知らぬ平板化の勢いで、五拍の固有名詞「三津五郎」も「ミツゴロー」と呼ばれる。この春から初夏にかけて、報道記者やカメラマンの報告で、「ヨルダンの首都餡饅」もいくつか食した。耳慣れぬ外国語に囲まれていると、母語の感覚が揺れるのだろうか。まれには逆のこともある。北朝鮮の地対艦ミサイル関連のニュースで、「コーカイ云々」と読まれたことがある（2003/4/1朝七時）。わたしは「紅海」と聞いたのだが、「公海」でなくてはならない文脈であった。

六月廿日朝、総合テレビ七時のニュースで、四十日ぶりにこの選挙に関する報道に接した。大統領就任式が近いのに開票がもめているというのである。その状況を現地から伝えた高木優記者の報告では、二回とも「アロヨ」であった。これがアナウンサーと放送記者との差なのか個人差なのか、わたしは知らない。

（二千四年夏）